

令和2年度(第71回)芸術選奨受賞者一覧

【文部科学大臣賞：18名 文部科学大臣新人賞：11名】

部門	賞名	受賞者	職業	授賞対象
演劇	大臣賞	おかもと けんいち 岡本 健一	俳優	「リチャード二世」の成果
		まつもと ゆうこ 松本 祐子	演出家	「 <small>ごじゅうし</small> 五十四の瞳」の成果
	新人賞	すずき あん 鈴木 杏	俳優	「殺意 ストリップショウ」ほかの成果
映画	大臣賞	すわ のぶひろ 諏訪 敦彦	映画監督	「風の電話」の成果
		いとう しんいち 伊藤 進一	音響効果技師	「海辺の映画館 キネマの玉手箱」ほかの成果
	新人賞	おだ かおり 小田 香	映画監督	「セノーテ」の成果
音楽	大臣賞	ふじもと あきこ 藤本 昭子	<small>そうきよく</small> 地歌箏曲演奏家	「第17回藤本昭子演奏会」ほかの成果
		ふじわら どうざん 藤原 道山	都山流尺八演奏家	「藤原道山20th Anniversaryコンサート」ほかの成果
	新人賞	すずき まさと 鈴木 優人	指揮者・鍵盤楽器奏者・作曲家	「読売日本交響楽団第603回定期演奏会」ほかの成果
舞踊	大臣賞	いせき さわこ 井関 佐和子	ダンサー	「夏の名残のバラ」ほかの成果
		かじや ゆりこ 加治屋 百合子	バレエダンサー	「海賊」ほかの成果
	新人賞	いちかわ すいせん 市川 翠扇	日本舞踊家	<small>わんきゅういろがみおくり</small> 「椀久色神送」松山ほかの成果
文学	大臣賞	あさい まかて 朝井 まかて	小説家	「類」の成果
	新人賞	り ことみ 李 琴峰	小説家	「ポラリスが降り注ぐ夜」の成果
美術	大臣賞	あおき のえ 青木 野枝	彫刻家	「青木野枝 霧と鉄と山と」展の成果
		みやしま たつお 宮島 達男	現代美術家	「宮島達男 クロニクル 1995-2020」展ほかの成果
	新人賞	エキソニモ <small>せんぼう すけ</small> (千房 けん輔) <small>あかいわ</small> (赤岩 やえ)	メディアアーティスト	「エキソニモ アン・デッド・リンク」展の成果
放送	大臣賞	いとう ひであき 伊東 英朗	ディレクター	「クリスマスソング 放射線を浴びたX年後」の成果
	新人賞	つかはら あゆこ 塚原 あゆ子	ディレクター・プロデューサー	<small>みゆうよんまるよん</small> 「MIU404」の成果
大衆芸能	大臣賞	みやもと ひろじ 宮本 浩次	ロック歌手	「ROMANCE」ほかの成果
		りゅうてい いちぼ 柳亭 市馬	落語家	「穴泥」ほかの成果
	新人賞	よねづ けんし 米津 玄師	シンガー・ソングライター	「STRAY SHEEP」ほかの成果
芸術振興	大臣賞	うかわ なおひろ 宇川 直宏	現在美術家・映像作家	<small>どみやん</small> 「DOMMUNE」の成果
	新人賞	そうま ちあき 相馬 千秋	アートプロデューサー	「シアター commons'20」ほかの成果
評論等	大臣賞	かみじま はるひこ 上島 春彦	映画評論家	「鈴木清順論」の成果
		ほそかわ しゅうへい 細川 周平	国際日本文化研究センター名誉教授	「近代日本の音楽百年」(全四巻)の成果
	新人賞	ひらの えみこ 平野 恵美子	神戸市外国語大学客員研究員	「帝室劇場とバレエ・リュス」の成果
メディア芸術	大臣賞	ゆあさ まさあき 湯浅 政明	アニメーション監督	「映像研には手を出すな！」の成果
	新人賞	ごとうげ こよはる 吾峠 呼世晴	漫画家	「鬼滅の刃」の成果

※敬称略・部門内50音順

令和2年度(第71回)芸術選奨
文部科学大臣賞 贈賞理由

部門	受賞者名	贈賞理由
演劇	岡本 健一	新国立劇場のシェイクスピア歴史劇シリーズすべてに主要な役で出演し、着実に演技力を付けてきた岡本健一氏。タイトルロールを演じた「リチャード二世」は、その集大成ともいえる見応えのある出来栄となった。王冠を巡る陰謀が渦巻くドラマで、苛烈な運命をたどる王の苦悩や悲哀を人間味たっぷりに造形。シェイクスピアの詩的なセリフにリアルさを吹き込み、共感を呼び起こした。ことに囚(とら)われの身となり、鏡を手に自分とは何か、運命を切々と問いかけるシーンは深く胸を打った。
演劇	松本 祐子	コロナ禍で劇団活動再開の第1弾となった「五十四の瞳」(鄭義信氏作)。瀬戸内海の小島にあった朝鮮人学校を舞台に、日本人と朝鮮人が助け合って生きている姿を描いた戯曲を、登場人物の心の壁(ひだ)に分け入るきめ細かな演出で立ち上げ見応えがあった。ベテランを始め松岡依都美氏ら中堅・若手俳優の緊密なアンサンブルを引き出し、地を這(は)うように生きる庶民の人生と、敗戦、朝鮮半島の独立による歴史的な混乱期を織物のように紡ぎ出し、ドラマを明瞭に浮かび上がらせた手腕は評価に値する。
映画	諏訪 敦彦	諏訪敦彦氏は、寡作ながら独特な演出で知られる映画監督である。近年はフランスとの合作による国際的な活躍が目立つが、現在の日本社会を描いた令和2年の「風の電話」は、東日本大震災で被災した1人の少女の孤独な姿を通して、震災後の被災者の心の傷と再生を尖鋭(せんえい)かつ繊細に描き出した。避難先の広島から被災地への少女の旅とそれが映し出す風景は、ともしれば風化しがちな震災の記憶を改めて問いかけながら、絶妙な演出力で魅力的な世界を築き上げている。
映画	伊藤 進一	映画の完成に不可欠な「音響効果」は仕上げの最後に作品に生命を吹き込む仕事だ。伊藤進一氏は「音響効果」の重要性を知る録音技師や監督から指名を受け続けて40年のキャリアを積み上げた。本年の「海辺の映画館—キネマの玉手箱」では時代から時代へと飛翔(ひしょう)を続ける大林宣彦監督の映像編集に対して、大胆に音を重ねることで映画内の各々の時代の感覚を的確に表現した。作品に「流れ」と「わかりやすさ」を付与した功績は極めて高い。
音楽	藤本 昭子	藤本昭子氏は長年、地歌箏曲(そうきょく)の演奏とともにその継承や普及にも力を注いできた。20年前に開始した「地歌ライブ」は令和2年末で100回目を迎える予定であったが、コロナ禍で延期された。そのような状況の中、秋の自身のリサイタルでは古典の伝統をあますところなく示し、助演の会でも確実な演奏を聞かせた。また、ジャズ・ピアノとの異色の共演を録音することにも成功。熊本の長谷検校(ながたにけんぎょう)ゆかりの三弦の修復演奏にもかかわるなど、活動が非常に充実していた。
音楽	藤原 道山	藤原道山氏は、瑞々(みずみず)しい感性と卓越した技術によって、尺八の可能性を追求している。「雙(そう)-SO-」と題し、尺八とピアノのデュオに焦点をあてたデビュー20周年コンサートでは、自作および気鋭のアーティストの作品を通して新境地を拓(ひら)き、都山流(とざんりゅう)本曲の演奏とともに観客を魅了した。古典の三曲合奏、KOBUDO-古武道-、藤原道山×SINSKE、風雅竹韻(ふうがちくいん)、オーケストラとの協演など、ジャンルの枠を越える多彩な活動のいずれにおいても、氏ならではの表現力があつた。存在感と発信力のある充実した活動は称賛に値する。

部門	受賞者名	贈賞理由
舞踊	井関 佐和子	井関佐和子氏はNoism結成当初より、同芸術監督・金森穰氏の壮大かつ緻密なビジョンを体現してきた無二のダンサーである。「夏の名残のバラ」では、バレエをベースにした確固たる技術と傑出した表現力を余すところなく発揮してダンサーの生きざまを踊り、清冽(せいれつ)な印象を残した。コロナ禍にあっても活動は衰えることなく、映像舞踊「BOLERO 2020」の配信など、舞踊の新たな可能性に挑戦し続けた。新潟発の日本を代表するダンサーとして、ますますの円熟と更なる進化が期待される。
舞踊	加治屋 百合子	ヒューストン・バレエ・プリンシパルとして国際的に活躍。令和2年は日本バレエ協会公演「海賊」に主演し、磨き抜かれた高い技術と深い洞察力、華やかな存在感をもって圧倒的な舞台を見せた。またウェブ発信を通して、コロナ禍で苦境にある日本人アーティストの支援活動を実行、賛同者は世界的に拡大している。海外を拠点に研鑽(けんさん)を積み続け、様々な形で日本バレエ界に貢献する加治屋百合子氏の活動は社会的影響力も大きく、高く評価されるものである。
文学	朝井 まかて	朝井まかて氏「類」は、森鷗外の末子として生まれた森類の生涯を題材として、生き生きとした筆遣いで見事に叙述された優れた小説作品である。文豪を父として持ちながら、高望みしない質素な人生をおくった類の、ひそかな愛や苦悩を、資料に基づきつつ、豊かな想像力と熟練した語り口で浮かび上がらせ、読者の共感を呼ばずにはいない。作家として高い評価を得た長姉(ちようし)の茉莉(まり)、随筆家になった次姉(じし)の杏奴(あんぬ)など、魅力的な人物を輩出した一家の、群像劇としての興味も尽きない。
美術	青木 野枝	青木野枝氏は、鉄素材による彫刻を一貫して作り続けてきた。工業素材のような鉄板を細く溶断して組み合わせ、半球状のヴォリュームのある彫刻をつくり出すといった手法によって伝統的金属彫刻から離れ、独自の道を切り拓(ひら)いてきた。近年では、その特別な彫刻を複数用意して空間を構成する壮大なインスタレーションを試みている。令和元年から令和2年にかけて国内3ヵ所の公立美術館で開催された大規模な個展では、光溢(あふ)れる鉄の森を実現し、新しい日本の彫刻のかたちを表した。
美術	宮島 達男	宮島達男氏は一貫したコンセプトとLEDの数字による表現で1980年代末から国際的に注目されてきた。日進月歩の先端技術に仏教的な死生観などを重ね合わせ、あらゆる人に宿る芸術性も重視する。千葉市美術館での個展は、精緻な年譜や資料とともにその実践の多様な発展を総覧する好機であり、その他2ヵ所で展示した、「時の海—東北」プロジェクトの最新作は東日本大震災以降の重要な取組みを、新作絵画は未来への可能性をそれぞれ提示した。令和2年は、氏の功績を過去作から最新作まで俯瞰(ふかん)する千載一遇の年であったといえる。
放送	伊東 英朗	「放射線を浴びたX年後」とは、伊東英朗氏が16年間も継続取材を重ねてきたシリーズのタイトルだ。米国は第2次大戦後、太平洋のビキニ環礁で水爆実験を繰り返した。1954年には日本のマグロ漁船が被曝(ひばく)した。「第五福竜丸事件」として知られるが、被曝はこれだけではなかった。シリーズ最新作の「クリスマスソング 放射線を浴びたX年後」は水爆実験に立ち会った元英軍兵士を取材し、被曝の広がりを実証した。氏はこれを基にして、3作目のドキュメンタリー映画作りに取り組んでいる。現代史の闇に沈んでいた衝撃的事実を粘り強く掘り起こし続ける調査報道は称賛に値する。

部門	受賞者名	贈賞理由
大衆芸能	宮本 浩次	ロック・バンド、エレファントカシマシの作詞、作曲、ボーカル担当の宮本浩次氏は、30年以上に及ぶバンド活動とは別個にソロ活動を開始。アルバム「宮本、独歩。」において幅広い音楽性に取り組んだ後、自身の音楽的なルーツでもある昭和歌謡の女性歌手曲を収録した「ROMANCE」を発表。同作において曲への深い洞察を見せ、巧みに心情を表現。音楽性こそ異なるがバンド活動における実直な歌唱同様、誠実で真摯な歌への取り組みが説得力をもたらし、見事な成果を生んだ。
大衆芸能	柳亭 市馬	人間賛歌を感じさせる人物描写と師匠五代目柳家小さん氏譲りの泰然自若(たいぜんじやく)としたスケールの大きな所作(しよさ)、力強さとみずみずしさが感じられる声の張りが心地よい芸を作り上げている。名作でありながら上演頻度が少ない「穴泥」では言葉の運びと間合いで笑いを多く生み出し、未曾有(みぞう)の感染症蔓延(まんえん)で疲弊した人々の心に癒やしを与えた。卓越した技芸(ぎげい)により、寄席(よせ)のみならず、全国の落語会で存在感を示しており、話芸の王道を進む第一人者として後輩の手本となっている。
芸術振興	宇川 直宏	開局から10年となるライブ配信チャンネルDOMMUNEは、単なるカルチャー配信サイトという概念を超え、その文化的プログラムを通して現代社会に生きる人々に問いかけ、勇気を与える、ひとつの「アート」活動として評価されてきた。宇川直宏氏自らが「現在美術」と呼ぶように、それは氏個人の世界観と、その「表現」に責任を負う覚悟によって支えられたメディア社会そのものを問う「媒体」であり、ライブストリーミング・プロジェクトというメタレベルの「作品」である。令和2年、世界中のライブ・イベントが突如中止を余儀なくされたこの年に改めてそのような「作品」の価値が認められた。
評論等	上島 春彦	上島春彦氏の「鈴木清順論 影なき声、声なき影」は独自の美学によって熱狂的に支持される映画監督、鈴木清順氏(1923-2017)の全体像を描き出す大著である。その多角的な論考は、映画化されなかった脚本「夢殿」を手がかりに清順作品の特質を引き出し、脚本家集団「具流(ぐる)八郎」の活動の実態を明らかにするとともに、頻出するモチーフや作品ごとの解説においても綿密な考察を展開している。書誌が付されていない点が惜まれるものの、この神話的な映画作家に対する新たな関心を喚起する画期的な著作である。
評論等	細川 周平	細川周平氏の「近代日本の音楽百年」(全四巻)は、黒船来航から終戦に至る大衆音楽の百年を独自の視点で描く。西洋音楽の勤勉な学習は帝国主義への屈服と位置付け、ひたすら土着(どちゃく)の耳に根ざした大衆音楽にこだわる著者は滝廉太郎や山田耕筰(こうさく)さえも無視するが、その大胆さこそが正に本書の魅力である。軍楽隊(ぐんがくたい)に始まりチンドン屋、寮歌、演歌、童謡、浅草オペラ、古賀歌謡にネエ小唄、ジャズにスウィングと、民衆の血を沸かせた音楽のみにこだわる氏の思いが、強い説得力の根源である。
メディア芸術	湯浅 政明	湯浅政明氏は、アニメーションの表現に革新的変化をもたらしてきたが、「映像研には手を出すな!」では、テレビアニメの枠の中で連続ドラマの面白さをアニメーション技法の技術的な絵解きを通して示した。高校生のイメージが、そのまま作品として練り上げられ、ファンタジーが現実から湧き上がってゆく様子が示され、それでいて現実のリアルにきちんと着地する。笑いの中に、アニメーションらしい動きの面白さを展開させ新鮮である。

令和2年度(第71回)芸術選奨
文部科学大臣新人賞 贈賞理由

部門	受賞者名	贈賞理由
演劇	鈴木 杏	1950年発表の戯曲「殺意 ストリップショウ」はいわば三好十郎版の「女の一生」だが、演出の栗山民也氏は巧みに時代性を刈り込み、1人の女性の心象に焦点をしぼった。「山田教授」に対する盲目的な崇拜が、ある時憎悪に転化する。しかし、男の矮小（わいしょう）卑俗なすがたに殺意も失せ、人間への「諦念」に変わる。こうした振幅の大きな感情の襞(ひだ)を、まるごと一人で演じてみせた鈴木杏氏の熱量は、いま特筆すべきものに思う。
映画	小田 香	映画が五感を使って感じる表現物であることを、改めて思い出させる、そんな作品を小田香氏はボスニアの炭鉱で、メキシコの泉で生んできた。「セノーテ」において、彼女の眼(め)が、耳が、肌が、全身が、カメラとなって、人を、歴史を、生命の果てしない営みと拮(むか)わりを観(み)ている。感じている。120年前の映画の「はじまり」を想像させる、揺るぎなく輝くひかりのような映画への好奇心と冒険心を感じさせる類のない新人の登場は、更なる映画の可能性を確信させてくれた。一体次はどこへ？との期待が高まる。
音楽	鈴木 優人	鈴木優人氏は、令和2年、活動の場を飛躍的に広げ、まさに文部科学大臣新人賞に相応(ふさわ)しい極めて大きな成果をあげた。読売日本交響楽団のクリエイティブ・パートナーに就任し、いわゆる「自粛期間」明けの演奏会を指揮したほか、シューベルトとベリオ、チャリノーを組み合わせ、あるいはケージとヴィヴァルディを対峙(たいじ)させるコンサートでも、作曲家としてのバックグラウンドを存分に生かし、卓抜のセンスを示した。さらに、ヘンデルのオペラをはじめ、音楽祭のプロデュースなどでもその才能を遺憾なく発揮した。
舞踊	市川 翠扇	平成18年、三代目市川ぼたん襲名以来、恵まれた容姿と花やかな舞台で注目。令和元年、ぼたんの名跡(みょうせき)を姪(めい)に譲り、四代目翠扇を襲名した。受賞の対象となった「椀久色神送(わんきゅういろがみおくり)」の松山は、踊りだけでなくせりふも芝居も必要で、しかも狂気した恋人に殺される難しい役どころだが、それを自然とこなした力量が評価された。陰鬱な作品でも、この人が舞台に出ると明るくなるのは、亡き父十二代目團十郎(だんじゅうろう)譲りの持ち味。一層の修練で舞踊家としての大成が俟(ま)たれる大器である。
文学	李 琴峰	新宿二丁目のバー、ポラリス。そこに集う人々の姿を通して、李琴峰氏は鮮烈な愛のかたちを「複数形」で描き出した。我々は今なお、いわゆる性的マイノリティーの人々を正常・異常のカテゴリーで捉えがちだ。「ポラリスが降り注ぐ夜」はそうした線引きのはざままで苦しむ若者たちの、悲痛な、しかし連帯と変化への希望に満ちた物語である。台湾からやってきた作者は力強い筆遣いで、内向しがちな現代日本の小説に清新(せいしん)な風を吹きこんだ。氏の受賞にふさわしい珠玉作である。
美術	エキソニモ (千房 けん輔) (赤岩 やえ)	新人賞は千房けん輔氏と赤岩やえ氏によるアート・ユニット、エキソニモが選出された。東京都写真美術館で開催された「エキソニモ アン・デッド・リンク」展が評価された。彼らは平成8年からいち早くインターネットやデジタル・デヴァイスを活動の場や手段に用いて、独特の社会風刺を込めた多岐にわたる作品を発表し続けている。美術部門では、複数名による創作集団への贈賞の前例がないが、ここでは、エキソニモという2名のアーティストの不可分なユニットでこそその活動が評価された。

部門	受賞者名	贈賞理由
放送	塚原 あゆ子	塚原あゆ子氏は、これまで「夜行観覧車」、「Nのために」、「アンナチュラル」など多数のテレビドラマを演出し、高く評価されてきた。現在と過去を往来する時間を大胆な構成で表現する一方、細やかなカメラワークで人の心の機微を掬(すく)い取るなど、硬軟を自在に使い分ける演出には定評がある。その力量は「MIU404」でも遺憾なく発揮され、社会の蔭(かげ)でひっそりと生きる声なき者の声に耳を澄ます野木亜紀子氏の脚本を見事に視覚化した。
大衆芸能	米津 玄師	米津玄師氏は2018年に発表され、ロング・ヒットとなった「Lemon」でその存在を広く知られ、Foorinへの提供曲「パプリカ」のヒットにより幅広いファンの支持を得た。ヒップ・ホップ的なセンス、歌謡曲的な要素を継承したメロディー、エレクトロニクスとアコースティックを融合させた斬新で充実した完成度の高い音楽性が評価され、アルバム「STRAY SHEEP」では新型コロナウイルス禍による混沌(こんとん)とした社会状況を反映した新曲も収録。沈静化したポップス界の再活性化を促す端緒となった。
芸術振興	相馬 千秋	相馬千秋氏企画・運営による、東北の豊かな文化と歴史、震災後の現在・未来をワークショップ形式で思考する「みちのく巡礼アートキャンプ」は5年目となる節目を迎えた。また、現代の社会課題を取り上げた国内外の斬新な作品を、様々な形式で上演するフェスティバル「シアター commons '20」は、新しい価値観、思考、手法を積極的に提示した。混迷を深めた令和2年においても氏の未来を見据えた取組は注目に値する。次代を担うプロデューサー、キュレーターとしてますますの活躍を期待したい。
評論等	平野 恵美子	「バレエ・リュス」とはフランス語で「ロシアのバレエ」のこと。専門家のあいだでは常識でも、一般的にはなぜ「バレエといえばロシア」のはずがフランスを起源とするのか、よくわからずにいるのではないか。平野恵美子氏は、この公然だが未知な歴史の転換と推移をめぐり、「帝室劇場年鑑」をはじめとする詳細な史料を、個々の演目や上演回数に至るまで愚直なまでに数え上げ、丹念に読み解き、バレエ史研究に新たな地平を切り開いた。学術論文であることをこえて、バレエへの人並みならぬ深い愛情に支えられたものであることも伝わってくる。
メディア芸術	吾峠 呼世晴	破格の単行本売り上げや映画の興行収入新記録を達成した「鬼滅の刃」。愚直なまでに優しい主人公と献身的な仲間たちが理不尽な絶望を乗り越える姿は、困難な現今(げんこん)に生きる人々の心を燃やした。「週刊少年ジャンプ」のモットー「友情・努力・勝利」を体現し、マンガとアニメを軸に社会現象と化した本作は、メディア芸術分野の歴史にふさわしい厚みと現在性を兼ね備えている。誰よりも次回作が待望される吾峠呼世晴氏に、敬意と激励を込めて贈賞する。

令和2年度(第71回)芸術選奨
選考経過

令和2年度(第71回)芸術選奨 選考経過一覧

部門	選考経過
演劇	<p>令和2年は、新型コロナウイルスの蔓延で演劇界も大きな影響を被った。公演の中止、中途での打ち切りや日程の大幅な変更、延期などが相次ぎ、例年のような状況で舞台に接することができない一年であった。演劇部門の選考にあたり、こうした異例の事態ではあったが、夏以降関係者の尽力で上演が行われてきたことを無にしないためにも選考が行われたことをご理解いただきたい。</p> <p>経過は次の通り。選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として10名、文部科学大臣新人賞候補者として12名の推薦があり、伝統芸能から現代演劇の劇作家、演出家、俳優等幅広い候補が並んだ。第一次選考審査会で、文部科学大臣賞には伝統芸能分野1名を含む5名、文部科学大臣新人賞は3名に候補者を絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では、候補者の業績について様々な角度から議論が重ねられた。まず文部科学大臣賞では、シェイクスピア作品「リチャード二世」で王の苦悩を深くかつ大胆に造形した演技力が選考審査員全員から高く評価され岡本健一氏が選出された。続いて、自劇団の文学座公演「五十四の瞳」で歴史に翻弄されながらも生きる人々を描いた戯曲を、丹念な人物造形と笑いを交えた快活さで演出した手腕が評価され松本祐子氏を選出した。文部科学大臣新人賞は、その実績と将来性をどう評価するかを討議となったが、2時間の一人芝居「殺意」で、膨大な台詞を巧みに操り圧倒的な説得力で観客に迫った鈴木杏氏の演技力が高く評価され選出となった。</p>
映画	<p>映画部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として11名、文部科学大臣新人賞候補者として15名の推薦があった。第一次選考審査会では、それぞれの候補者の活動実績と、選考審査員及び推薦委員から提出された推薦理由に基づいて活発な議論がなされた。その結果、文部科学大臣賞候補者4名、文部科学大臣新人賞候補者5名に絞り込まれた。</p> <p>第二次選考審査会では、各選考審査員が、自分が推薦する候補者について補足説明を行うとともに、それ以外の候補者についても所見を述べる形で、より踏み込んだ議論が重ねられ、文部科学大臣賞には「風の電話」で一人の被災した少女の再生の旅を通して、風化しがちな震災の記憶を改めて問いかけた映画監督の諏訪敦彦氏と、「海辺の映画館 キネマの玉手箱」ほかの作品で、映画に溶け込む様な大胆な生音(なまおと)・効果音で作品の世界観・奥深さを見事に表現した音響効果技師の伊藤進一氏を選出した。文部科学大臣新人賞には、「セノーテ」でマヤ文明にルーツを持つ人々の集団的記憶や原風景を、独創的で誰も見たことのない世界として映しとった映画監督の小田香氏を選出した。</p>
音楽	<p>令和2年、音楽界は、とりわけ厳しい環境に置かれた。その困難の中でも絶えることなく続けられた芸術家たちの意欲溢(あふ)れる活動が、社会に明るい灯(ともしび)をもたらすところとなったことは、特筆に値する。選考審査員及び推薦委員からは、文部科学大臣賞候補者として合わせて10名、文部科学大臣新人賞候補者には12名の推薦があった。第一次選考審査会においては、選考審査員及び推薦委員提出の書面の検討に加え、選考審査員による厳正なる審査の末、それぞれ4名に最終候補が絞られた。</p> <p>各候補の業績の確認、精査を経て開かれた第二次選考審査会では、活発にして公正なる議論が交わされたのち、文部科学大臣賞2名、文部科学大臣新人賞1名がいずれも全会一致で選ばれた。文部科学大臣賞の藤本昭子氏、及び藤原道山氏は、それぞれが主催した演奏会の圧倒的な成果はもとより、いわゆる「助演」の幾多の機会にも際立った光を放っていたことも、各々の活動の充実ぶりを何より如実に示すものとされた。一方、いわゆる洋楽の分野で、従来、日常的であった海外からのアーティストの来日が儘(まま)ならぬなか、文部科学大臣新人賞の鈴木優人氏が楽壇(がくだん)に新たな輝きを与える大きな役割を担ったことにも、高い評価が与えられた。</p>
舞踊	<p>舞踊部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として11名、文部科学大臣新人賞候補者として11名の推薦があった。第一次選考審査会の結果、文部科学大臣賞は6名、文部科学大臣新人賞は2名に候補者を絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では審議を深め、文部科学大臣賞は、Noismのダンサーとして芸術監督・金森穂氏の作品を卓越した身体表現で演じる井関佐和子氏、ヒューストンバレエ団プリンシパルとして活躍する加治屋百合子氏に票が集まり、文部科学大臣新人賞は、スケールの大きな演技とスター性を発揮する市川翠扇氏に票が入った。世界中が新型コロナ禍で舞台活動が制約された1年であったが、Noismは金森、井関コンビで舞台公演と共にオンラインの映像舞踊などで多彩な作品を発表し、加治屋百合子氏は米国テキサス州ヒューストン市から帰国し2月の日本バレエ協会公演の「海賊」で高い評価を得た。市川ぼたんから改名した市川翠扇氏は、ぼたん時に脚光を浴びた実力を「椀久色神送」の松山役でその実力を見事に開花させた。</p>

令和2年度(第71回)芸術選奨 選考経過一覧

部門	選考経過
文学	<p>文学部門では、選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞候補者として14名、文部科学大臣新人賞候補者として10名の推薦があった。第一次選考審査会において、資料及び参考資料を慎重に閲覧・考査したうえで、審議の結果、文部科学大臣賞は6名(小説家4名、詩人1名、歌人1名)、文部科学大臣新人賞は6名(小説家2名、俳人2名、歌人2名)に候補者を絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では、文部科学大臣賞、文部科学大臣新人賞の双方を通じて、小説(創作)分野と詩歌分野のバランスについて疑問が呈される場面もあったが、あえて考慮する必要はなし、との結論を得て、共に小説が一作品ずつの受賞となった。まず文部科学大臣賞については、文豪、森鷗外の末子として生まれ、偉大なる父の愛情と名声の下、何かを達成しようとしてかなわず、凡人として生きていかざるをえなかった森類の生涯とその心境を円熟した筆致(ひっち)で描き切った朝井まかて氏の「類」が、ほぼ満票に近い形で受賞した。文部科学大臣新人賞については、様々な性的マイノリティーの集まるバーを舞台に、そこに関わる人々の姿を丹念に描き、東アジアの現代史や歴史を背景に、政治運動、文化的多様性、差別といった様々な問題に果敢に切り込んでいった李琴峰氏の「ポラリスが降り注ぐ夜」が、やはり圧倒的支持を得て受賞に至った。</p>
美術	<p>美術部門は、選考審査員及び推薦委員から文部科学大臣賞候補者23名、文部科学大臣新人賞候補者15名が推薦された。第一次選考審査会では、選考審査員が推挙した作家について推薦理由を述べ、さらに全ての候補者について作品及び推薦理由を慎重に審議した。その結果、文部科学大臣賞は9名、文部科学大臣新人賞は6名の候補者に絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では、第一次選考で絞り込んだ作家の作品と業績について審議した。特にユニットに対する授賞のあり方とその評価、さらに美術部門とメディア芸術部門との範疇(はんちゆう)について活発な意見が交わされた。その結果、文部科学大臣賞5名、文部科学大臣新人賞3名の候補者を絞り込んで、最終的に投票によって文部科学大臣賞は青木野枝氏並びに宮島達男氏、新人賞はエキソニモ(千房けん輔氏・赤岩やえ氏)を決定した。青木野枝氏は「青木野枝 霧と鉄と山と」展(府中市美術館)、宮島達男氏は「宮島達男 クロニクル 1995-2020」(千葉市美術館)、新人賞はエキソニモ「エキソニモ Un-Dead-Link インターネットアートへの再接続」(東京都写真美術館)の成果が高く評価された。</p>
放送	<p>放送部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として14名、文部科学大臣新人賞候補者として10名の推薦があった。第一次選考審査会では、候補者の業績を詳細に検討し長時間にわたる議論を重ね、文部科学大臣賞候補者を5名、文部科学大臣新人賞候補者を3名に絞った。</p> <p>第二次選考審査会には、候補者の作品を再視聴するなどして臨み、更なる熟議の結果、南海放送ディレクターの伊東英朗氏を文部科学大臣賞に決定した。米国などが1946年以降繰り返した太平洋ビキニ環礁での水爆実験。「クリスマスソング 放射線を浴びたX年後」では、被曝(ひばく)した日本の漁船の乗組員たちと、実験に参加した英国軍兵士たちの「過去」と「現在」を描き、忘れてはならない核の恐怖と人間の罪を問い続ける、粘り強い取材力が高く評価された。また、文部科学大臣新人賞には、演出家の塚原あゆ子氏を選出した。MIU404(みゅうよんまるよん)は、刑事ドラマでありながら、社会的弱者や声なき者たちに光を当てた作品であり、テレビドラマの可能性を大きく広げた氏の力量が評価された。</p>
大衆芸能	<p>大衆芸能部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として9名、文部科学大臣新人賞候補者として12名の推薦があった。第一次選考審査会では、文部科学大臣賞は4名に、文部科学大臣新人賞は7名に候補者を絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では、コロナ禍という状況にも関わらず顕著な成果を上げた候補者について、選考審査員が深く掘り下げた議論を繰り広げた。その結果、文部科学大臣賞には、カバーアルバムと初のソロアルバムの2作品を発表し、大衆性や聴衆への説得力が評価された宮本浩次氏を選出した。続いて、東京落語らしいおらかで心地よい芸風を見せる柳亭市馬氏の充実ぶりを評価する意見が出され、文部科学大臣賞に決定した。ベテランの受賞が例年多い中で、今回は活躍がさらに期待される1960年代生まれ2氏の受賞となった。文部科学大臣新人賞の選考では、ブームとなった「パブリカ」のセルフカバーやロングセラーの「Lemon」などを収録したアルバムを出した米津玄師氏について、完成度の高さや、幅広い年代に支持されている点を推す声が多く、受賞が決まった。</p>

令和2年度(第71回)芸術選奨 選考経過一覧

部門	選考経過
芸術振興	<p>芸術振興部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として16名、文部科学大臣新人賞候補者として15名が推薦された。選考審査員は芸術振興部門の趣旨にふさわしい候補者を、文部科学大臣賞から6名、文部科学大臣新人賞から4名に絞り込み、第二次選考審査会に臨んだ。</p> <p>いずれの賞も、コロナ禍における活動が焦点となったが、文部科学大臣賞には、2010年に個人で開局したライブストリーミングスタジオ兼チャンネル「DOMMUNE」において、多分野を視野に入れた積極的かつ果敢な発信を続けてきた宇川直宏氏が、多数の選考審査員の支持を得て選出された。特に、無観客配信が一般的になった昨今、氏の取り組みは、極めて先駆的で多層的な広がりを獲得していると評価された。一方の文部科学大臣新人賞は、長年舞台芸術や美術、社会と切り結ぶイベントやワークショップなどを多彩なプログラムを推進してきたアート・プロデューサーの相馬千秋氏を選出した。新たな「コモンズ＝共有地」を生み出す「シアターコモンズ'20」ほかの業績は、分断と不和の時代において、分かり合えない者同士がどう回路を開いていくのか、大いに問題提起するものとして評価された。</p>
評論等	<p>評論部門では、選考審査員及び推薦委員から、文部科学大臣賞候補者として18名、文部科学大臣新人賞候補者として15名が推薦された。第一次選考委員会で、芸術選奨の趣旨に適した内容や意味を備えていると思える作品として、文部科学大臣賞候補者は6名(映画・映像論及び音楽の分野から2作品、美術、文学の分野から各1作品)、文部科学大臣新人賞候補者も6名(文学とその周辺文化から2作品、美学、デザイン、写真、舞踊の分野から各1作品)の候補者を絞り込んだ。</p> <p>第二次選考審査会では、文部科学大臣賞としては、明治以降百年の歴史の中で大衆音楽を中心に、周辺領域の文化現象を広い視野と独特の文体で論じた「近代日本の音楽百年」全4巻を著した細川周平氏が多数の委員の評価を得て選出された。また、著名な映画監督の時代と作品を「鈴木清順 影なき声、声なき影」と題して精密に論じた上島春彦氏が選ばれた。文部科学大臣新人賞は、「帝室劇場とバレエ・リュス」で膨大な資料を読み込み、精緻な分析の上で隣接領域の分野との関連で描いた平野恵美子氏が選出された。</p>
メディア芸術	<p>メディア芸術部門では、文部科学大臣賞候補者として12名、文部科学大臣新人賞候補者として13名の推薦が選考審査委員及び推薦委員から寄せられた。時代とともに変化し続ける分野であるメディア芸術の特性や分野全体の動向を踏まえつつ各委員それぞれの領域を超え活発な議論を行った。第一次選考審査会では推薦された全候補者について資料や寄せられた推薦理由をもとに各作品の作家やシリーズの中での位置づけ等を念頭に慎重に検討し、文部科学大臣賞は12名から5名、文部科学大臣新人賞は13名から5名に絞り込まれた。</p> <p>その後候補作品の更なる吟味を経て第二次選考審査会が開かれ、文部科学大臣賞には近年活発に作品を発表している湯浅政明氏のアニメーション作品「映像研には手を出すな！」が、その仮想世界と現実との関係という極めて現代的なテーマを湯浅氏独自の新鮮な切り口で描いたことが評価され、また文部科学大臣新人賞には時代の共感を得る主人公を中心に描かれた物語世界でメディアを超え社会現象にまで広がったマンガ「鬼滅の刃」を制作した吾峠呼世晴氏が選出された。</p>

芸術選奨実施要項

昭和45年 5月13日
文化庁長官裁定
一部改正 平成11年 5月13日
一部改正 平成13年 1月 6日
一部改正 平成15年 4月 1日
一部改正 平成16年 4月 1日
一部改正 平成19年 12月26日
一部改正 平成24年 4月 1日

1 趣 旨

芸術各分野において、優れた業績をあげた者またはその業績によってそれぞれの部門に新生面を開いた者を選奨し、これに芸術選奨文部科学大臣賞または芸術選奨文部科学大臣新人賞をおくることによって芸術活動の奨励と振興に資する。

2 部 門

- (1) 演劇（歌舞伎・能楽・文楽・新派・新劇・ミュージカル等の劇作家，演出家，演技者，舞台美術家等）
- (2) 映画（劇映画・記録映画等の演出家，脚本家，撮影者，演技者等）
- (3) 音楽（邦楽・洋楽・オペラ等の演奏家，指揮者，作曲家，演出家，舞台美術家等）
- (4) 舞踊（邦舞・洋舞等の舞踊家，演出振付家，舞台美術家等）
- (5) 文学（小説・短歌・俳句・詩・大衆文学・児童文学等の作家，翻訳家等）
- (6) 美術（絵画・彫刻・工芸・書・写真・デザイン・建築等の作家）
- (7) 放送（ラジオ・テレビのドラマ・ドキュメンタリー等の作家，演出家，演技者等）
- (8) 大衆芸能（落語・講談・浪曲・漫才・大衆演劇・ショー・ポピュラーミュージック等の作家，作曲家，演出家，演技者等）
- (9) 芸術振興（新しい領域や複数の部門にわたり文化芸術活動を行っている者）
- (10) 評論等（芸術評論家，文化芸術活動に著しい貢献のあった者）
- (11) メディア芸術（デジタル作品（デジタル技術を用いて作られたアート作品やエンターテインメント作品等）・アニメーション・マンガの作家等）

3 賞の対象

- (1) 賞は，文部科学大臣賞状及び賞金とする。
- (2) 芸術選奨文部科学大臣賞は，特に優れた業績をあげた芸術家（個人）を対象とするもので，各部門2名以内（ただし，放送部門，芸術振興部門，メディア芸術部門は1名以内）を原則とする。
- (3) 芸術選奨文部科学大臣新人賞は，新人の芸術家（個人）を対象とするもので，各部門1名以内を原則とする。
- (4) 過去に受賞したものは同一部門の同種の賞については，原則として対象としない。

4 選考の時期及び選考の基準

- (1) 選考は，毎年，原則として1月中に行うものとし，選考の対象となる業績は，主として前年の1月から前年の12月までの間にあげられたものとする。
- (2) 選考に際しては，これまでの業績に加え，将来性，年齢，他の受賞歴等も勘案して選出する。

5 選考方法

- (1) 各部門ごとに芸術に関し識見を有する者の協力を得てその審査を行い，受賞者を決定する。
- (2) 前項の審査のため，各部門ごとに選考審査会を設置する。
- (3) 各部門ごとに推薦委員を設け，選考審査会に候補者を推薦する（評論等部門，芸術振興部門を除く）。
- (4) 選考審査員及び推薦委員は当該部門の実演家，専門家及び学識経験者の中から文化庁長官が委嘱する。

芸術選奨実施細則

平成11年 5月13日
文化庁次長決裁
一部改正 平成13年 1月 6日
一部改正 平成15年 4月 1日
一部改正 平成16年 4月 1日
一部改正 平成19年12月26日
一部改正 平成24年 4月 1日

1 選考実績

実施要項4(2)の選考にあたっては、下記のことに留意する。

- (1) 日本芸術院会員、重要無形文化財(各個認定)保持者、叙勲、紫綬褒章受章者、日本芸術院賞受賞者等すでに国の栄典を受けている者については授賞対象としない。
- (2) 物故者は対象としない。
- (3) 受賞者の年齢は、授賞時原則として文部科学大臣賞は70歳未満、新人賞は50歳未満とする。
- (4) 受賞者は、芸術活動を通じて社会に貢献し、国民の模範となり得る者であることとする。

2 選考方法

- (1) 選考にあたっては、各部門の選考審査員及び推薦委員が、それぞれの部門にかかる候補者を推薦することができる。ただし、評論等部門及び芸術振興部門については、他部門の選考審査員及び推薦委員からも、それぞれの部門にかかる候補者を推薦することができるものとする。
- (2) 芸術振興部門における「新しい領域や複数の部門にわたり文化芸術活動を行っている者」とは、次のような者をいう。
 - ① 新たな芸術分野を創造、または普及させるなど著しい貢献のある者
 - ② 複数の部門・分野にわたった文化芸術活動を行い、その活動が斯界に大きな影響を与えている者
 - ③ 他部門に該当しない文化芸術活動を行っている者で、その活動が国内もしくは国外において広く一般に認知され、一定の評価を得ている者

3 実施要項3(3)に定める「新人の芸術家」は次のものをいう。

- (1) 活動の期間及び実績が比較的少ないこと。
- (2) 今後活躍が大いに期待されること。

令和2年度(第71回)芸術選奨委員一覧【選考審査員】

【演劇部門】		【放送部門】	
小田 幸子	日本大学芸術学部非常勤講師、能狂言研究家	碓井 広義	メディア文化評論家
河野 孝	文化ジャーナリスト、演劇評論家、元日経新聞編集委員	岡田 恵和	脚本家
児玉 竜一	早稲田大学教授	岡室 美奈子	早稲田大学坪内博士記念演劇博物館館長、早稲田大学文学学術院教授
出口 逸平	大阪芸術大学教授	鈴木 嘉一	放送評論家
濱田 元子	毎日新聞論説委員兼芸芸部編集委員	中町 綾子	日本大学芸術学部教授
宮辻 政夫	演劇評論家	水田 伸生	株式会社日テレアックスオン執行役員
渡辺 弘	(公財)埼玉県芸術文化振興財団業務執行理事兼事業部長	八木 康夫	TBSテレビ社長室顧問、プロデューサー
【映画部門】		【大衆芸能部門】	
明智 恵子	キネマ旬報編集部エグゼクティブ・エディター	大友 浩	演芸研究者、文筆家
荒木 啓子	びあフィルムフェスティバル・ディレクター	小倉 エージ	音楽評論家
岩波 律子	岩波ホール支配人	長井 好弘	演芸評論家
滝田 洋二郎	映画監督	布目 英一	横浜にぎわい座館長
富山 省吾	映画プロデューサー、日本映画大学理事長	古川 綾子	上方芸能研究者
部谷 京子	映画美術監督	前田 憲司	芸能史研究者
村山 匡一郎	映画評論家	油井 雅和	毎日新聞記者
【音楽部門】		【芸術振興部門】	
岡部 真一郎	明治学院大学教授	新井 鷗子	東京芸術大学特任教授
加納 マリ	日本音楽研究家	小林 真理	東京大学教授
國土 潤一	音楽評論家	島 敦彦	金沢21世紀美術館館長
谷垣内 和子	(公社)日本芸能実演家団体協議会実演芸術振興部企画室長	武田 和	(公財)川喜多記念映画文化財団代表理事
中村 孝義	大阪音楽大学理事長、大阪音楽大学名誉教授	久野 敦子	(公財)セゾン文化財団常務理事
野川 美穂子	東京芸術大学講師	三輪 眞弘	情報科学芸術大学院大学教授
宮澤 淳一	青山学院大学教授		
【舞踊部門】		【評論等部門】	
福田 奈緒美	桜美林大学准教授、舞踊評論家	今福 龍太	文化人類学者、東京外国語大学名誉教授
亀岡 典子	産業経済新聞文化部編集委員	五十殿 利治	筑波大学特命教授、国立美術館理事
長野 由紀	舞踊評論家	神山 彰	明治大学教授
平野 英俊	舞踊評論家	川村 湊	法政大学名誉教授
古井戸 秀夫	東京大学名誉教授	権木 野衣	美術批評家、多摩美術大学教授
本多 美男	(公社)日本バレエ協会業務執行理事	武田 潔	早稲田大学教授
守山 美花	清泉女子大学非常勤講師	樋口 隆一	明治学院大学名誉教授
【文学部門】		【メディア芸術部門】	
尾崎 真理子	早稲田大学文学学術院教授	佐藤 雅彦	東京藝術大学大学院教授
栗木 京子	歌人	しりあがり 寿	漫画家
篠田 節子	小説家	原 久子	アートプロデューサー、大阪電気通信大学総合情報学部教授
沼野 充義	名古屋外国語大学副学長、教授	山村 浩二	東京芸術大学教授、アニメーション作家、絵本作家
野崎 敏	放送大学教授	横田 正夫	日本大学文理学部教授
正木 ゆう子	俳人	吉村 和真	京都精華大学マンガ学部教授・副学長
松浦 寿輝	作家、詩人、東京大学名誉教授	米光 一成	ゲーム作家
【美術部門】		【部門内五十音順】	
内田 篤真	MOA美術館館長		
笠原 美智子	アーティゾン美術館副館長		
片岡 真実	森美術館館長		
加藤 泰弘	東京学芸大学教授		
鴻池 朋子	アーティスト		
菅谷 富夫	大阪中之島美術館館長		
内藤 廣	建築家、東京大学名誉教授		
中井 康之	国立国際美術館研究員		
村田 眞宏	豊田市美術館館長		
柳原 正樹	独立行政法人国立美術館理事長、京都市立近代美術館長		

令和2年度(第71回)芸術選奨委員一覧【推薦委員】

【演劇部門】		【美術部門】	
網本 尚子	東京富士大学教授	五十嵐 太郎	東北大学大学院工学研究科教授
新井 浩介	児演協理事、日本芸術文化振興会演劇プログラムオフィサー	植木 啓子	大阪中之島美術館準備室芸企画担当課長
犬丸 治	演劇評論家	小倉 実子	京都国立近代美術館主任研究員
井上 桂	水戸芸術館 ACM劇場 芸術監督	小沢 剛	美術家、東京芸術大学教授
大堀 久美子	編集者、ライター	柏木 智雄	横浜美術館副館長
河内 厚郎	阪急文化財団理事、兵庫県芸術文化センター参与	神林 菜穂子	ミュゼ浜口陽三・ヤマサコレクション主任学芸員
祐成 秀樹	読売新聞東京本社文化部編集委員	黒川 廣子	東京芸術大学教授
中井 美穂	アナウンサー	杉戸 洋	画家、東京芸術大学准教授
秋尾 瞳	映画演劇評論家	田村 麗恵	東京都美術館学芸員
広瀬 依子	追手門学院大学国際教養学部講師	土橋 靖子	大東文化大学特任教授
【映画部門】		永田 晶子	美術ライター、ジャーナリスト
阿部 久瑠美	鎌倉市川喜多映画記念館学芸員	橋本 真之	鍛金家
宇田川 幸洋	映画評論家	花里 麻理	茨城県陶芸美術館学芸課長
小野寺 修	映画録音監督	土方 明司	平塚市美術館館長代理、武蔵野美術大学客員教授
掛尾 良夫	城西国際大学メディア学部招聘教授、学部長	保坂 健二郎	東京国立近代美術館主任研究員
関口 裕子	文筆家、編集者	光田 由里	美術評論家
田中 誠	読売新聞文化部記者	菅川 明	デザイナー
中条 省平	学習院大学教授	【放送部門】	
暉峻 創三	映画評論家	伊藤 純	プロデューサー
野村 正昭	映画評論家	音 好宏	上智大学文学部教授
矢田部 吉彦	東京国際映画祭シニア・プログラマー	上瀧 徹也	評論家、日本大学名誉教授
【音楽部門】		坂元 裕二	脚本家
小畑 恒夫	昭和音楽大学客員教授	佐藤 一彦	フリープランナー
河野 典子	音楽評論家	里見 繁	関西大学教授
椎名 亮輔	同志社女子大学教授	西村 与志木	JCA西村オフィス代表、フリープロデューサー
高畠 整子	音楽プロデューサー、ライター	丹羽 美之	東京大学大学院情報学環准教授
武内 恵美子	京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター准教授	樋口 尚文	映画評論家、映画監督
千葉 優子	宮城道雄記念館資料室室長	矢島 良彰	プロデューサー
塚原 康子	東京芸術大学教授	【大衆芸能部門】	
津上 智実	神戸女学院大学教授	相羽 秋夫	演芸評論家
野平 一郎	東京芸術大学教授	今岡 謙太郎	武蔵野美術大学教授
山田 治生	音楽評論家	香取 良彦	東京芸術大学非常勤講師
【舞踊部門】		佐藤 友美	「東京かわら版」編集長
藍本 結井	舞踊批評家	中村 真規	演芸プロデューサー
飯塚 友子	産経新聞記者	萩原 健太	音楽評論家
猪崎 弥生	放送大学東京足立学習センター所長(特任教授)、お茶の水女子大学名誉教授	日高 美恵	演芸ライター
楯屋 一之	神奈川県国際文化観光局舞台芸術担当部長兼神奈川県立青少年センター参与	松尾 美矢子	演芸ライター
古賀 司郎	(公社)日本舞踊協会前事務局長、古典芸能評論研究者	村井 康司	音楽評論家、尚美学園大学講師
桜井 多佳子	舞踊評論家	渡邊 寧久	演芸評論家
新藤 弘子	舞踊評論家	【メディア芸術部門】	
坂東 亜矢子	演劇評論家	宇川 直宏	現在美術家
望月 辰夫	日本芸術文化振興会舞踊分野プログラムディレクター	内田 まほろ	日本科学未来館展示スーパーバイザー
渡辺 真弓	週刊オン・ステージ新聞編集長、舞踊評論家	遠藤 諭	株式会社角川アスキー総合研究所首席研究員
【文学部門】		門倉 紫麻	フリーライター
安藤 礼二	文芸評論家、多摩美術大学教授	木船 園子	アニメーション作家
恩田 侑布子	俳人	工藤 健志	青森県立美術館総括学芸主幹
小島 ゆかり	歌人	城 一裕	九州大学大学院芸術工学研究院准教授
田中 和生	文芸評論家、法政大学文学部教授	中川 大地	評論家、編集者
蜂飼 耳	詩人、立教大学文学部教授	藤津 亮太	アニメ評論家
藤島 秀憲	歌人	三浦 知志	尚綱大学現代文化学部准教授
松家 仁之	小説家、編集者		
松永 美穂	早稲田大学教授		
宮内 勝典	作家		
吉田 修一	作家		

【部門内五十音順】